
妾の前世は女王である。

ROM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妾の前世は女王である。

【Nコード】

N0703Z

【作者名】

ROM

【あらすじ】

今世は貧しい農家の娘であるが。しかし、妾は自分がいかに前世で恵まれておったか、何一つ分かっていなかったようだ。妾の知らなかった民の現実を事実目にし、妾は逃げ出した。一匹の猫と動物たちと暮らしていた妾であるが、突然その時はやってきた。妾は前世で治めていた国の対極にあった国で侍女をすることに…なるやもしれぬ。

今世の始まり（前書き）

このお話はまず完結目指します。

なので、悪い評価は気にしちゃうのでとりあえず評価無しで…

最初は暗いですが、基本明るくしたいと思ってます。

結末はまだはっきりとは決めていません。

今世の始まり

妾わらわの前世は女王である。

今は洞窟の中で生きている幼子に過ぎぬが、たしかに妾は今の世に生まれ出でる前、メレイフィア国の8代目女王アーメリア1世であった。

気づいたのは妾が現で母親と思われる女の腹から出て3ヶ月経った頃であった。

それまではぼんやりとした意識の中、なにも考えず人としての欲求に従って生きていたようであるが、ちょうどその頃妾は自分が見覚えのない古びた木の天井を初めて意識したのである。

そして妾は自分がうまく動けず、歯もなく、言葉もしゃべれない事にやっと気づいた。

当然最初は誘拐されたのだと思ったが、その考えはすぐに打ち消した。

死んだときの記憶は鮮明に残っているし、妾の腕や手がむちむちとした小さな赤子の手であったからな。

ああ、生まれ変わりという考えがすぐ浮かんしたのは妾の最初の息子、ヘンリーのおかげである。

あれは妾が第2夫であるティルとの息子を腹に宿していた頃であったか、妾がヘンリーの父が死んだときの話をしていると、ヘンリーはじつと妾の目を見つめながら言ったのだ。

「母上は、生まれ変わったら何になりたいの？」と。

あるとき真剣に考えていなかったら、生まれ変わったなどという考えは簡単には浮かばなかっただろうし、今よりもっと焦っていたことだろうな。

まあとにかく、妾はすぐに理解し、今世の状況を把握し始めた。

妾は貧しい農家の6番目の子供であるようだった。

上に息子3人、娘が2人。

皆黒髪で痩せておった。

母親とおぼしき女が妾に「お前なんて産むつもりは無かったのに。」と言ったときは驚いたな。

妾が子供を産んだときは国を挙げて喜んだものだが。

自分が腹を痛めて産んだ女にそう言わねばならぬとは、なんて悲しいことだろうと思った。

貧しさのせいか皆心が荒んでおるようで、言葉のわからぬと思われるている赤子の妾に愚痴を言ったり、妾をつねったり、殴ったりして笑っておった。

妾は国民全体のことを見ていると思っておったが、妾の治世の時代にもおそらくこの家のような家庭はあったのであろうな。

妾は自分の自惚れに恥じ入った。

神は妾にこのことを教えたかったのかもしれない。

妾は今できることを精一杯しようと思った。

2歳にもなると、妾は他の子供達に混じって働いた。

相変わらず女達に蹴られたりはしておったが、男達は妾にかまわ

なくなった。

妾はその頃になって初めて家族に「妾の前世は女王である。」と言った。

家族の前世はなんだったのだろうと思つてのことだったが、彼らは妾を虫を見るような目で見て殴った。

おそらく誰も前世の記憶がないのだろう。

妾は混乱させないように、この話をもうするまいと思つた。

そして、14歳になった。

妾は男達の妾を見る目が色欲を含んでいるのに気づいた。

気をつけてはいたが、ある日の夜兄たちが妾の布団をめくりあげ口を塞いできた。

そのとき妾は今世で初めて魔術を使い、兄たちはそれに驚いて逃げていった。

前世で初めて覚えた最下級なものであったが、今世で周りに魔術をつかえる者はいないので驚いたのであろうな。

容姿は違つても、魔術は前世と変わらぬようであることは気づいておつた。今世ではなるべく使うまいとは思つておつたが、仕方あるまい。

魔術は皆使えるわけではない。都の魔術学院に入れられることになつたら妾はここを離れることになる。家族は妾を家に置いたままにしてくれるであらうか。

妾はそう考えておつた。

けれどその翌日、昼間は妾も兄たちも普通に過ごしたが、夜水を飲むとうと家の外に出たとき、妾は母親と父親の話す声を聞いた。

「ボーイ達から聞いたかい？あの娘、魔法を使えるようだよ。」

「ああ聞いた。あいつら手え出そうとしたらしいな。」

「やっぱり、売っちゃまおうよあの娘。」

あんたの言うとおりで成長するまで待つてよかったよ。魔法が使えるなんてね。」

「あいつだけはよく見れば整っていたからな。人買いが村に来るの来週だろう？驚くぞ、あの男。あの娘は口調は古めかしく変だが魔法まで使える処女となると、まずいないだろうからな。」

「あたしにはあの娘は昔からきもち悪かったがね。妙に大人びていて気取ってる。」

それに覚えてるか？前世がどうか言ったの。あれで働きが悪かったら狼のえさにしてやるとこだったよ。」

「ああ、そんなこともあったな。まあいい。」

とにかく、あの娘には人買いを魔術学院の使者だと言えば疑うまい。くくく、銀貨何枚になるだろうな、来週はうまい酒が飲めそうだ。」

「領主にもそう言おうよ。あの娘あの夫人に可愛がられてるんだ。金目のものを盗みもせず……」

そのまま妾は家を出た。

数日森をさまよい、妾は倒れた。

そのあとのことはよく覚えておらぬ。

気がついたら月の光が差し込む洞窟の中におり、傍らには何故か猫が一匹寝そべっておった。

今ここで暮らして一月になる。

今世の始まり（後書き）

すいません、先をすすめて書くにつれ、容姿等々かなり重要な部分を変えたい変えたい………変えちゃえ！
とてしまいました…。

森での生活（前書き）

1話、容姿と年齢変えました。

10話まで書いたところで色々不都合が生じて…。
本当に申し訳ない。

森での生活

ふむ。

これでよいだろう。

妾は川から出ると少し濡れたスカートを絞ってから洞窟に戻り始めた。

川には魚を捕まえるための仕掛けを作っておいた。明日には何匹か入っているはずである。

村の子供達に教えてもらったのが役に立ったのだ。

妾は洞窟にもどりながら、食べられる木の実やきのこを探した。これも彼らが教えてくれたものだ。

そういえば何も言わず村を出てきてしまったな。申し訳ないことをした。

いつかまた出会えるだろうか、と彼らの明るい笑顔を思い浮かべた。

ほとんどの村の者達はみな、妾に優しくかった。

妾の家族の皆はなぜか村の者達に嫌われておったが、妾は少し変わっていても好きだと言ってくれた。

彼らと全力で遊び、笑い、駆け回るのはひどく楽しかった。

領主などは妾を引き取るとまで言ってくれた。

もちろん家族は皆そろってあるべきだと礼を言って断ったが、すると領主の夫人は妾をきつく抱きしめてきた。

そう、家族は皆一緒にいるべきだと、妾は思っていた。

だというのに、妾は今なぜ一人でいるのだろう。

洞窟に戻ると、子ウサギたちが妾の寝床の周りで駆け回っていた。

草を集めて作った妾のベッドの上には、親ウサギが猫と一緒に丸まって寝ておる。

妾が洞窟に入っていくと、子ウサギたちは立ち止まり、鼻をひくひくさせて妾の周りに集まってきた。

何か葉っぱを持ってくれば良かったな。

妾がしゃがんで木の実などを脇におき、一匹の背中を撫でてやると、他の者達も妾に背を差し出してくる。

これは王宮では知らなかったが、妾は他の人間達よりずっと動物に好かれやすいらしい。

妾の周りに村中の猫たちが集まってくるので、妾は当初気味悪がられたものだ。

少し苦笑しながら安心しきっている白いいくつもの毛の固まり達を見ていると、沸々と罪悪感が浮かんできた。

最初は落ちていたガラスで作ったナイフで、彼らを殺して食べようと思ったからだ。

けれど王宮では普通に食べていたというのに、妾は警戒心もなく妾に近づいてきた動物たちを殺せなかった。

情けないことだ。

妾は治世をしながらも、一人では何もできなかったのだ。

他のことでも、村の者達が教えてくれた知識が無ければ生きて行けてはいなかっただろう。

妾はそのことを前世で知らなかった。

いや、政務をする内に妾はそのことを忘れていったのかもしれない。この一月のうちに、妾はそう思い至っていた。

まあ、あのときこやつらを殺せなかったことは本当に良かったと思っておるが。

こやつらは妾の今の生活で、精神面の支えとなってくれているのだ。

妾はそんなことを思いながら子ウサギを一匹胸に抱え込んでから立ち上がり、草のベッドの元へと向かった。

猫は寝たままだが、親ウサギは黒いまるまるとした目で妾を見つめておる。

妾は親ウサギの傍らに座り、子ウサギを彼女の隣に置いた。

「そろそろ帰った方が良いのではないか。暗くなつては狼たちが出るよ。」

妾は狼たちとも仲いいが、だからといって彼らにウサギを襲うなとは言えない。

それは自然の理だ。

妾ごとき人間が介入できるはずもない。

親ウサギは心得たというように妾を理知的な黒い目で見つめ立ち上がると、とてとてと洞窟の入り口へと歩いていった。

それに続いて子ウサギたちも駆けていく。

おそらく明日の昼になるとこの洞窟にまた来るのではあろうが、夜は今はいない父親とも一緒に自分たちだけの巣穴で暮らすのだ。

それも自然の理だと、思っておった。

妾は家族と一緒に暮らすのは自然の理だと思っておったのだ。

親ウサギが寝ていた所に妾は体を倒した。

前世だったらマリが「シーツをお換えしますからお待ちください！」と言うのだろうが、妾の衛生を気にする者などここにいるはずもない。

妾はけだるい疲労感を感じ、目を閉じた。

人買いなど、親が子の安全を慮っての躰のための嘘だと思っていた。

金のため、まして酒のために親が子売るなど、現実の話だとは思えなかった。

前世では、妾の一族は大陸で有名なほど仲の良い家族だった。どろどろとした王族関係も他国ではよくあると聞いておったが、ヘンリーが次期王として異論を唱える者はいなかったし、兄弟間も非常に仲が良かった。

妾の夫は第一夫が死んだ後3人迎える事になったが、もともと互いに顔見知りで、喧嘩もじゃれあいのようなものだった。

平和だった。

穏やかだった。

家族とは、そういうものだと思っていたのだ。
疑うことなど無かった。

妾はなんて愚かだったのだろう。

妾は、知らないことが多すぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0703z/>

妾の前世は女王である。

2011年12月3日19時07分発行